



1_天空を赤く染める炎の柱。来場者にどよめきが走る 2_最前列で手筒を見た子どもたちは迫力に驚くばかり 3_ステージを見つめる親子。こんな笑顔が至る所で見られた 4_川高郷土芸能部の楽しそうな赤石太鼓。祭りのオープニングを飾った 5_金魚すくいに挑戦する浴衣姿が愛らしい子 6_会場で見かけた男の子。「赤い金魚が好きなの」と祭りを満喫している様子



4年目を迎えた 有志の 夏祭り

やっちやう祭2010密着ドキュメント

台風4号が過ぎ去った8月13日

夜の高郷河川敷は

人々の熱気に包まれていた

有志がつくり上げた4回目の「やっちやう祭」

祭りにかけるスタッフの情熱は、

手筒花火の迫力にだって負けない

暑い熱い一夜限りの物語

心動かされる瞬間をカメラが追った



激しい炎が天空を焦がす

13日午後6時半。赤石太鼓の演奏が祭りの開始を告げる。徐々に人が集まり出す。浴衣姿の女の子もお母さんに手を引かれてきた。空が暗くなるころには、会場は人でいっぱいになった。舞台では、ダンスチームの軽快なパフォーマンスが、祭りのムードを盛り上げる。会場内ではオリジナル盆踊りが繰り広げられた。エレクトーンを中心に輪になって踊る人々。高らかな歌声と笑い声が響いた。

午後8時半過ぎ。太鼓の音が会場内に轟くと、祭りはフィナーレを迎える。最後の目玉、赤石太鼓と手筒花火のコラボレーションが始まった。激しい炎が天空を焦がす。男たちの体を火花が包み込む。どよめきと歓声が交差する観客席。その迫力に、その余韻に、いつまでも酔いしれていた。

やっちやう祭の起こり

2年前の夏のある日。夏祭りに情熱を傾ける一人の男性を取材した。名は前田孝一。今年も8月13日、やっちやう祭実行委員長として、高郷河川敷を駆け回っていたその人だ。

「夏祭りをやりたいと具体的に思ったのは、清涼祭(青年団主催)がなくなったのがきっかけ。青年団自体がなくなってしまう、祭りも途絶えてしまったんです。お盆で帰省している人を連れて行くところがないのはさみしい。ならば自分たちでやってみようと、実行委

この夏の日を忘れないー



夏祭りと言えば欠かせない盆踊り。やっちやう祭オリジナルの盆踊りを楽しむ

取材撮影協力：岩下聡（吉田町）、志村美幸（富士市）